
走り書き

乾燥用

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

走り書き

【Nコード】

N6809P

【作者名】

乾燥用

【あらすじ】

800字ぐらいで小物を作れないかと思案してみた結果がこれ。大分砕けた書き方をしてみたので、というのも書く理由の一つ。連載の体を為してはいるものの実際は短編。

基本的に推敲、筋など考えていないのでえらいことになってます。

弁当

先日まで病院ですつと飯を食っていた。で、出てくる飯と言うのは仕出しの弁当なのだ。

その仕出しの弁当、というのは朝、昼、晚三食、若干の内容の差はあるものの、いわゆる幕の内弁当よりも、若干品のいい弁当が出てくる。

煮しめがつく、卵焼きがつく、酢の物がつく、何やらグラタン風の物もつく、たまにはちょこちょこから揚げ風の物もつく。そして、それらのおかずを冷や飯と共にかっ食らう。

多分、誰もがそれなりに美味しいと思う味付けなのかもしれない。しかし、私はこの弁当と言う奴が子供の時から嫌いだ。子供の時は本当に喉に通らなかった。吐いてしまったほどだ。

確かに今でこそ私も弁当は食う。弁当しか目の前になければ勿論食べる。別に嫌いだからと言って駄々をこねて投げ捨てたりはしない。だが喉にすんなりと通らないのもまた事実だ。

何故嫌いか、と言えば、実家暮らしで温かい飯を日々食らっている身として、慣れていないというのも勿論あるが、それ以上に弁当とは孤独の象徴なのだ。

孤独の象徴、というのは何も幼少時、遠足にでも行った時に集団に入りきれずに一人で弁当を食らった、という背景を意味しているのではない。とか言いつつ、そういう記憶があるようなないような……。

話を折った。そうではなく、弁当というもののそれ自体が孤独の象徴だと思うのだ。あれほど放って置かれている、という気がするものも中々ない。

そりゃ勿論、誰かが愛情を持って作ったのかもしれない。しかし、飯は冷たいのだ。温かみが時間と共に風化してどこかへ去って行ってしまったのだと、幼少時、何故喉に通らなかったのは、この年に

なれば、そう思える。

言うなれば、弁当は間接的な愛情表現なんだろう。作っている瞬間の愛情を想像しなければ、ただの冷たい飯だ。子供の時にそんな表現では伝わりづらい。

ごく稀に見かける子供が冷たい白米をぼそぼそ食う様は、寂しい。

弁当（後書き）

822字。

もうちよつと上手く前半まとめられないものかとも思った。

繋ぎも大分弱い。

オチはこういう形になったが、本来はこう書くつもりだった。

「温かい飯の旨さ、本当の飯の旨さを知っている」

今見るとこれもどうなんだと思わなくもないが。

犬

犬を見て泣いた。小学三年生頃のだったと思う。

犬を見て泣いた、と言っても何も可愛らしい犬の轢死体を見て悲しみが押し寄せたとか、そういう話ではない。気持ちが高ぶっていた時、犬を見て、泣いたのだ。

もう十何年前の話なので、私がどんなことを思っただけで泣いていたのかは定かではないが、犬の考えもなく、好きなように吼え、小便し、糞を垂れて、走り回ってる様を見て泣いた。

そして大体こんなことを考えた。

何で犬の方が自由に走り回っているのだろう。どうして自分はこうもウジウジと悩んでいるのだろう。私は犬になりたい。こんな風に自由気ままに、生きて行く方が余程立派じゃないかと。

今考えれば大分浅はかだ、こいつは頭をどこかに打ったのかもしれないと思わなくてもいい。思わなくてもいいが、そんな下らないことに純粹に思い巡らせていたのだから、尊敬できる部分がないこともない。

今こんなことを思うことはない。ある意味成熟したのかもしれない。しかし、どこか欠落している気がする。

少なくとも年々思考することは減っている。私は喫煙者だから煙草の成分が脳のシナプスか何かを破壊して、どんどん頭が狂っていつているのかもしれない。

年をとるにつれて高望みはしなくなった。物欲も減った。ただただ飯を食って、寝て、煙草を吸ってこんな下らないことを書いていく。

そう考えれば、子供の頃から一周して私は犬になった。犬のように好きなように生きて、犬のように、考えなしに生きている。子供の頃と比較すれば悩むことは減った気がする。

だが、犬の辛さを知った。犬の空しさを知った。子供の頃の方が

余程人らしかった。うじうじしている方がよほど人間らしい。感情を持って何かしらしようとして、必死にもがいているのだから。

さあ、私は成長しているのだろうか、退化しているのだろうか。

案外、何も変わっていないのかもしれない。

犬（後書き）

792字。

大分よくなったような気がするが、今度は随分硬くなった。

こちらが本性だから仕方ないものの、もうちょいマシにならないものかと思う。

オチ弱は留まるところをしらんnaーと思う。

まともなオチってそもそもなんだ、とも思うが。

病院にて

腰の痛みがひどくて何日か入院することになった。不摂生が祟ったか、運動不足が祟ったかはわからないが、現に痛いものだから、仕方なく病院に行ってみたところ、そのまま入院する運びとなった。私は今の今まで入院などしたことがない。私は極めて健康な人間でもないが、極めて不健康な人間でもなかったから、医者にかかることさえもそんなに少ない方であった。しかし、現に入院していることを思えば騙し騙しの生活だったのかもしれないと考えた。

また近い将来こんなことがあるのかもしれない考えると、別に入院したところで、とも思った。こんな考えを持つから入院などするのだろうかとも思ったが。

そういうわけで、入院などしたことなど今まで一度もしたこともない私だから、入院する一週間の着替えだけを持って出かける時の心意気は随分気楽なものだった。

結局のところ、腰痛を治す以上の意義を入院に見出そうとしたら、これで色々と休む都合がついたと思うしかないと考えたものだから、その気軽さがわかっていただけるものかと思う。大分無邪気なものだったと、今になればそう思わざるを得ない。

それで病院について、病室に案内されて、病院内の服を渡されて、家から持ってきた着替えを病室に置いて、そして渡された服に着替えた。流れ作業であった。こうして簡単に病人が一人出来上がってしまうのだから何だか情けなくなる。自負であるとか、気概であるとか、所信表明であるとか、そういったことを私は尋ねられることなく、こうして私は一人の病人となった。

実際、私は病人で、入院する前にそう診察もされたはずなのだが、私の意志に反して病人にさせられたという感じが沸いてくる。何故だろうか。

その後は血を抜いたり、薬を飲んだり色々あって一日目が終わっ

た。夕方から病室に入ったものだから案外時間の進みが早かった。別に何を考えるまもなく眠りについた。

二日目になった。腰を痛めている私は絶対安静を医者に突きつけられ動くことを禁じられた。ここからが問題である。

まず思ったことは軟禁という単語である。動かないのではなく、動けない。

山椒魚を思った。どうすべきかと思った。どうかしてやろう、そうする考えは持っている、だが実際は何も策などはない。その状況に酷似していると思った。

山椒魚と違って、既に私に至ってはどのようなことを悟っていたものだから、どうもこうもなかった。ただただ軟禁という単語が脳の中に垂れ流しで現れるだけである。

病院でたった二日ぼんやり過ごしたただけなのだが、こういう日々が軟禁かどう考えた。軟禁という日常では想像しがたい単語の実態はこういうものなのだと肌身で実感すると、次に、ぼんやりと刑務所で過ごす日々はどれほどのものかと、こう考えた。

一週間後の未来、軟禁状態のわが未来、こう考えるだけでも屈せし思いがする。半年、一年、三年、五年、時には十年、二十年とそんな長い時間を狭い刑務所内で日々暮らすことを思うと刑務所とは、日頃ぼんやりと思っている以上に刑務所なのかもしれんと、こう思う。

病院にて（後書き）

1283字。

大分前に書いたが、お蔵入りももったいなくて上げた次第。

その為800字の制限も吹っ飛んで、内容もいつも以上に尻切れ蜻蛉になった。
よかろうて。

逃亡者

ガタンゴトンと列車は揺れていた。やけに振動が酷いので、数秒毎に体が少し動く。私はその揺れに合わせて、少し体と首を捻って周りを見渡す。周りを気にしているという行為を周りに悟られないように動く。その行為は自分が犯罪者だと思いたくない気持ちに反して、自分を犯罪者だとラベル付けする行為だと言う事に気付くまで続けられた。ただ、気付いた後も何となく他人から見られている気配が不思議と付き纏う。不安な気持ちに終わりは無いが、既に乗ってしまった列車であるから何か起きても逃げ場が無い。そこまで考えが至った時、私は開きなおってじつと横座席に座っていることに決めた。そして、いざとなれば、列車から飛び降りても逃げてやるという算段の覚悟だけを決めた。

そのように色々考えている内に列車は目的の駅の二つ前の駅に到着した。窓から見える景色は晴天で、列車を待っていた人々が荷物を抱えて、乗車する準備を整えていた。昼間の田舎駅であるためにそれほど乗車する人はいない。私が一番気にしていた警官も、駅には見当たらなかった。この列車に乗って既に三十分ほど経つ。もし、乗車する際に駅員が私のことを気づいたのならば、そろそろ警官が駅で待っていてもおかしくはないと覚悟を決めていただけに、安堵の溜息が小さく漏れた。溜息をついた瞬間、やはり自分のことを犯罪者だと感じていることを悟って、また小さく溜息をついた。

窓を眺めていたら、車掌が発車の笛の音を響かせた。私はその音を聞いて目線を窓から外して少し俯いた時、突然「こちらは空いていますか？」と背後の方から声をかけられた。思わず驚いて少し腰を上げながら振り返ると、この駅で乗車したであろうブラウス姿の婦人が立っていた。少し眉を上げて、私の前の空席に座ろうとしていた。私は動揺を隠そうとできるだけ自然に「どうぞ」と答えた。しかし、声は少し上ずっていた。婦人は小さな会釈をした後、買い

物後であろう野菜が詰まった袋を隣に置いて、紺のスカートの皺を気にしながら私の前に座った。

私は少し俯いて、スカートの皺を気にしている婦人の姿を上目で覗き込むように盗み見た。婦人の表情は私のことを知っている様子には見受けられなかった。

スカートを整えた婦人は「すみません、驚かせてしまいました」と婦人は馬鹿みたいに丁寧な声をかけてきた。

「いえ、お気になさらずに」と私は流暢に答えながらも、その丁寧さに若干の訝しさを感じた。もしかすると、単純におしゃべり好きなのかもしれない、しかし……とその後続く言葉を私は飲み込んだ。

逃亡者（後書き）

1060字ほど。

これは半年以上前に書いて、やはりもったいなくて上げたものの。
評価は前回と変わらず。

加えて言えば、つかず離れずの書き方は未だ健在。
まさに駄作。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6809p/>

走り書き

2011年1月2日15時55分発行